

フレッシュ・コンビが語る！

# 橋幸夫 & 木田ヨシ子



(写真は楽しく語り合う左より木田ヨシ子・橋幸夫)

歌、映画、そしてテレビにと活躍いまや人気NO1の歌手、橋幸夫さんは、「黒いオルフェ」でデビューした神戸っ子歌手の木田ヨシ子さん（松陰女子高卒）、リバイバル・ソング「無情の雨」で有名な佐川ミツオさんと歌の勉強を一緒に始めたという大の仲よしです。先月、始めて神戸の舞台上で歌うという橋さんと、友情出演した木田さん、このフレッシュ・コンビに出演合間のたのしいおしゃべりをきいてみました。

## ゴキゲンな神戸肉

木田 カゼの具合はどう大丈夫なの？ムリしちゃだめよ。

橋 うん。ちよつとキツイかな。だけど神戸で舞台上に立つのはこれが始めてだからガンバリますよ。

（前夜からカゼ気味で、熱っぽい顔の橋さんを、木田さんはさかんにいたわってました。）

木田 舞台が終ったら、いつも私が自慢している「ふるさと神戸」をゆっくり案内しようと思ってたのに、ザンネンだワ。

橋 そりや、ボクだったのしみにしてましたよ。二、三度、神戸にはきたことあるんだよ。でもこんどこそ、いつも君がうるさく宣伝（笑）してる元ブラヤセンター

街、トア・ロード、それに大好きなみなにも行ってみたかったんだけどね。

木田 ホントヨ。私もはり切ってただけにっかりだワ(笑)でも昨日はスリルあったわネ。

橋 そうそう、ドンクという喫茶店ではフアンの方にも見つけなかったんだけど、次にいった店、そら、なんぞいったっけ?

木田 舶来品のものを売ってた店でしょ、"ミッツちゃん"。あそこでフアンの人に見つかり、とりかこまれそうになったのネ。わからないようにカモフラージュしてたのに。

橋 あの時二人ともずい分走ってたね。とめてた自動車のところまでマラソンさ(笑)

木田 かけ足だったけど、ドライブした六甲山から見た私が自慢する神戸の印象をどうぞ(笑)

橋 いやに改たまるんだナ(笑) そうですネ、海、山あり、波止場あり、それに街が何にかキチンとしていて気持がいいナ。

どここにも都心へ出るのに便利だし、お店に出ている品物だっでイカしたのがずい分あるじゃない?好きなスポーツシャツを買いたいと思ってたんだけど、何しろ時間もなしし、ゆっくり買いたいものでもないんで。

それとさ、神戸はやっぱり食べものがおおいよ。肉なんて最高ですよ。もうゴキゲン、ゴキゲン木田 おほめにあずかりありがとうサンです(笑)

食べもの恨みはこわい(笑) っていうけど、約束していた関西名物のお好み焼屋さんにも、この分ではいけそうもないナ。だって

いくら変装したってさ、すぐアツ橋幸夫だってわかっちゃうでしょもう落ちついて食べていられないものネ、人気ものはツライです。橋 とんでもない(笑)

木田 どう、始めて神戸でステーションに立ったご感想は?

橋 王子体育館がハチ切れるほどのフアンの方がいらしてくれただで、もうカンギキ、それこそカゼなんか吹っとんじゃいましてよ、熱心に応援してくださったし、

君は神戸出身だから、ずい分たくさんのお友だちがきてたようだね木田 そうなの、小学校(北野)の同期生からキレイな花束いだいたし、近所の人たちもたくさん声援にきてくださったワ。

やっぱりいいな、ふるさと神戸は。みなさん一生懸命応援してくださるの。がんばらないと申しわけない。

クリスマスは歌って、たのしく、橋 もうすぐ今年も終っちゃうけど、お互いに忙しかったね。

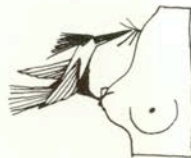
君は、今年のクリスマスはどくなの?ボクは残念ながら(笑)ジャズ喫茶ACBに出演なんだ。木田 私もお仕事があるワ。

橋 休みなら、歌のこと、映画のことなど仕事を忘れて、家の人たちと一緒に楽しいクリスマスの宵をすごしたいんだけどなあ。

でもボクたちは、歌を歌ってフアンの方に楽しんでもらえれば何もいうことないんだから。今年のクリスマスは、ボク自身も歌いながらフアンの人たちと楽しむよ。

木田 そうね歌えば楽し。大いに歌ってフアンの方たちと一緒に楽しい宵を送るのがやっぱりシア

### ひんくこーなー



美人を花にたとえることは、古今東西を問わず、殿方の趣味のようです。日本紀や古事記といった古い書物の中にも美人を桜にたとえたり、大根にたとえたりしています。大根というのは色の白いのをいっただけで、決して「足」のことでありませぬ。

中国の詩人馮雲鷗は夷に見上げた花くらべを残しておりました。こんな具合にです。ラン||水際立った女(ひと)だ。スイセン||すぐれた女だ。ハス||しとやかな女だ。ウメ||おんな仙人だ。モモ||はすはな女だ。スモモ||やしよ女だ。(おそらく町の天使のことらしい)ナジ||色白女だ。ポタン||金持ちの貴族の女だ。キク||ものしずかな女だ。シヤクヤク||遊山の女だ。カヅラ||学のある女だ。バラ||たおやかな女だ。カイドウ||酔った女だ。サンチャヤ||なまめく女だ。アキアオイ||風雅な女だ。ギョクラン||清らかな女だ。"そんなのはお上品過ぎて、ちっとも面白くないわ"といったような顔をしてるのはフランスの文学者ルナールです。彼にかかればバラの花もこんな調子。バラ「あんた、私をキレイだと思ってる?」クマバチ「下の方を見なくちゃ...」バラ「おはいりよ」

(T)



ワセなことね。

橋 ゆっくりしたレジャー・タイムもほしいけど、ボクの場合は映画と歌とTVに追いまくられて寝るヒマもないでしょ。

好きなボクシングも釣りもやりたいですヨ(笑)

木田 私は、橋さんほど忙しくはないけどさ……

橋 どうして、どうして、君もなかなか活躍してるじゃない

木田 どういたしまして(笑)ヒマがあればレコードをきいてのんびりしたいワ。外へ出るのあまり好きじゃない。

橋 ボクも急にヒマがとれば家にいるな。どうしてすごそうかなんて考えてるうちにすんじやうんだよ。結局、ボクはそうしてムダな時間を費いやしてるよ。普通の人のように外へ出て遊ぶなんてまづできないものね。

木田 遊ぶっていえば、まず同じ仲間同士っていうことになるワ。

とくに地方公演に出かけたときなどは最高ね。

橋 ホント、そら、この五月に北海道へ君や山中さんたちといっただときはユカイだったね。夜おそくまで君たちとオジャベリしたじゃない。レンタアイについてあんまり熱中しちやって、翌日みんな声が出なくなつて大笑いしたっけ(笑)

木田 あれはケツサクね。よく君たちアキないくらいジャベるなつて笑われたけど。旅先きでみんなでいろいろダべるのは楽しいワ。橋 あの時は、その前にお化けごっこ(笑)して騒いだね。君もずい分ハデに騒いでたじゃない。

木田 いま思い出しても、いちばん楽しい旅行だったワ。

橋 来年は、もう少し仕事を整理して、自分が人のものを見ながら勉強できるようにしたいナ。

木田 私は、いろんなリズムの勉強がしたい。私自身はスローなムードのある曲が好きなんだけど。だから松尾和子さんのようなタイブが大好きだな。自分の歌で好きなのはやはりレビニー曲の「黒いオルフェ」ね。いろんな思い出があるんだもの。

橋 ボクもレビニー曲「潮来笠」は忘れられないよ。「南海の美少年」もボクの大好きな歌だ。

木田 ごく最近の「江梨子」の歌もステキじゃない。私あの歌も大好きだワ。

橋 吉田先生のリサイタルで歌ったのね。そうだな、僕もあの歌は最近のものではゴキゲンだな。

木田 ツメえりの学生服で歌ってたワネ。橋さんって、着物姿もイカスケドサ、あの学生服もとてもよかつたワ。フアンの人たちも騒いでたわよ。

橋 それほどでもありませんよ。ところでサ、君といいやはり神戸出身の佐川君といい、僕とはずい分縁が深いナ。何しろいっしょに歌の勉強を始めた仲間だものね。来年もみんな仲よくがんばりましょうよ。

木田 ほんと、いつまでもお互いにはげまし合い、仲よくがんばりましょうね。

(和香葉荘にて)

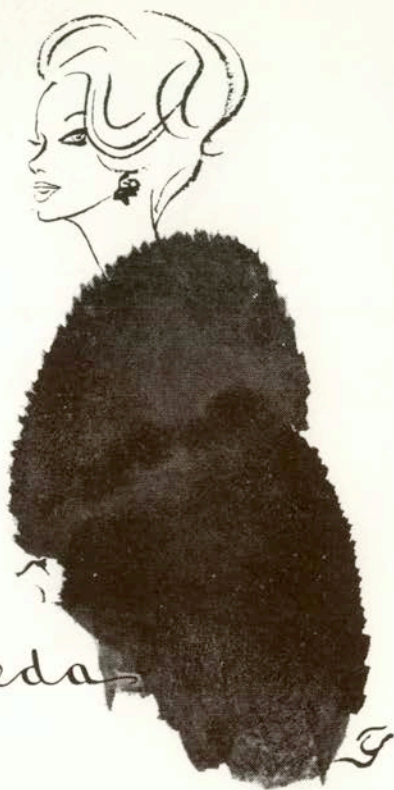
### びんく・こーなー



このあいだ、あるグラマー女優の会見記を読みました。彼女のことによろしい。「ハダカも立派な衣装よ」なるほど、そうに違いありません。モンテニューは人間のからだに不完全だから、他の動物から毛皮や羽の「借り着」をするんだといっております。ハダカに自信のおありの方は、これ以上に立派な衣装はありますまい

昔、昔、大昔、ギリシャの三女神ジュノー、ミネルバ、ピナッスがパリスを審判にして美を競ったことがあります。さて、ジュノーその日のイデタチはといえば天の女王らしい「錦繡」を着飾り、誇らかなクジャを従えてのおでましです。そしてパリスに富と権力を約束します。ミネルバはと見れば、照り輝く知恵のヨロイに身を固め、謎のスフィンクスのカブトをかぶり、夜でも目が見えるフクロウを使者としてのサツソウたる登場です。

彼女はパリスに決して誤ることのない賢明さを与えることを約束します。最後に現われたピナッスとはいえば、これはまたどうしたこともか、身に一糸もまとわぬ全裸をもつて出現し、パリスには単に一人の美女の愛を与えようと約束します。そこでパリスは迷うことなくピナッスに喜んで賞品の黄金のリンゴを授与しました。(T)



毛皮の店

ウエダ

元町2丁目・TEL ③0686

今年もデコレーションケーキ  
のご用命は……ドンクへ



フランス菓子

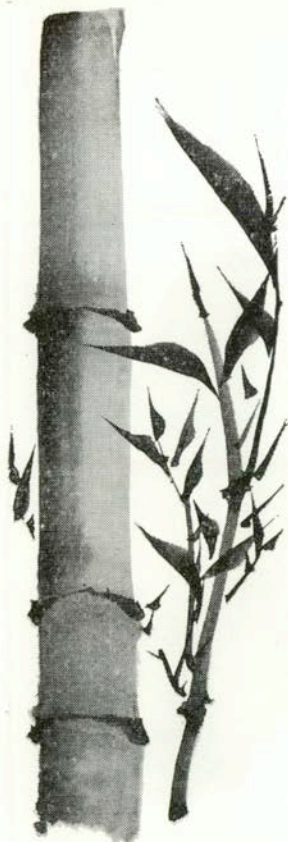
ドンク

三宮センター街  
電 3-1750





きものさろん 西店 神戸  
 服飾細貨 東店 東京  
 きものと細貨 新橋店 東京



おんがら庵

TEL ③ 8836  
 ③ 0629  
 (571) 0807

西宮店  
 神戸・東店  
 東京・新橋店

須磨浦ロープウェイ



初日の出は鉢伏山上で

■お年玉贈呈 ▽期間 1月1日～1月3日(3日間)

▽場所 鉢伏山上(ロープウェイ初発より)

▽お年玉 毎日先着巻千名様に電化製品多数(空くじなし)  
 が当たる抽せん引換券を進呈

◆ロープウェイの運転時間

元旦は 6時15分初発 二日以降は 9時15分初発

■俳句募集 五十嵐播水先生選「新年雑詠」

▽期間 1月1日～1月7日(7日間)

▽方法 須磨浦展望閣入場に投句用紙をお渡しいたします

初詣 バス

◇二見ヶ浦ご来光と伊勢参宮 12月31・1月1日 一四〇〇円

◇伊勢参宮と二見ヶ浦一泊 1月1・2日の2回 二七〇〇円

◇京都三社めぐり 1月1・2・3・7日 四〇〇円

◇大和三社めぐり 1月1・2・3・7日 五〇〇円

■お問合せと お申込みは 三宮案内所②二八三〇  
 兵庫案内所⑤六九六六

山陽電車



# 沈んだ欲望

陳 舜 臣  
え・松 本 宏

「浅田さん、大丈夫かね？」伊藤はなんべんも繰返した言葉を、また口にした。

「大丈夫だよ」浅田はきかれるたびに、愛想よく、あかるい誠実な声で答えた。

道らしい道もなく、まわりの樹が途方もなく大きいやつばかり。地面はじめじめして、薄気味がわるい。はじめての人は、このあたりを人跡未踏の土地と想ってしまいうらしい。

「浅田君はこの山の主（ぬし）だぜ。まかせときゃ万が一にもまちがいはねえ。安心しな」

首に巻きつけたタオルの端で顔を拭きながら、江原が言った。その語調は、臆病な伊藤をからかっている、と受けとれないこともなかった。だが伊藤は、そんなことに気をまわす余裕はないらしい。

遭難——という言葉が伊藤の頭のなかで、さきほどから跳びはねている。こんな道を、ほかの人間がかって通ったというのか……信じられないことだ。リーダーの浅田はゆっくり構えているが、体面上そうしているにす

ぎないのかもしれない。墜落間際の操縦士は、乗客を混乱させまいと、懸命に最後まで落ち着き払ったふりをするときいたが……。

巨木の群れはわがもの顔に天にむかって聳え、低いところでは、太古を思わせる羊歯類が、所せましとばかり生い茂っている。植物の世界である。こんなところならたとえ百年前に人間が通っても、そのにおいがまだ残っていきそうに思えた。それなのに、そんなにおいはちっともしないのだ！

「二十分ほど行くと、急にひらけた所へ出る。そこを抜けると、ちょっとした難所があるけれど、なあと、時間にして五分ばかりですむんだ。そうだな、道幅は一尺ぐらいで、左手は切り立った岩、右手は深い谷、断崖絶壁というところだな。しかし眺めはすばらしい。眼下はるかに、清溪が白い泡を立てて流れている。岩の恰好もおもしろいしね」

浅田は同行の二人に説明した。

「なかなかしゃれた所らしいな」



そう言って、江原は機嫌よく笑った。

伊藤は江原の笑いに釣られて、顔面の筋肉をうごかしかけたが、それは忽ち凍りついてしまった。「笑い」ではなく「恐怖」をマスクに彫ったような顔になった。ダンガイゼツベキという言葉が、植物世界の奥底から、卑小な人間を嘲笑するかのようによこしましてきこえた。伊藤は頭がくらくらして、登山に来たことを、あらためて後悔したのであった。

しかし浅田が言ったとおり、広いところ、すなわち巨木の魔手の及んでいない場所に出たとき、伊藤はホッと息をついた。

妙な顔をしたのは、浅田であった。

「あれはなんだろう？」

浅田の指さす方向に、伊藤と江原も目をむけた。屏風のような赤い岩肌の壁が左手をさえぎっている。その根もとに黒々としたものが堆と積まれているのが見えた。

浅田がまっ先に駆け出した。彼は途中でふりかえって

「飛行機の残骸だよ。遭難したらしい」

ソウナンという言葉が、またしても伊藤の脆弱な神経をおびやかした。

「ほほう、まだかすかに煙があがってるぜ。遭難していくらも経っていねえな」

江原が小手をかざして言った。

「生存者がいるかな？」浅田は足を早めた。

浅田は目的物のそばに着いた。

「旅客機じゃない」彼はあとから来た二人に自分の意見を述べた。「そんなに大きなやつじゃない。小型の飛行機だ」

黒焦げの残骸は案外つましやかな量しかなかった。

「ヘリコプターかな？」と江原が呟いた。

「そうじゃない」浅田は自信ありげに首を振った。

「ヘリコプターよりは大きい。飛行機にはちがいないさ一人乗りとか二人乗りてのがあるだろう。そんなやつと思っね」

まだ余燼のくすぶっている黒い物体のまわりを、浅田はぐるぐるまわって点検していたが、やがて立ちどまって、「生存者なし」とおごそかな声で言った。——「どうやら一人乗りらしい。遺体はここに一つしかない」江原はそこへ走って行った。伊藤はうごかなかった。うごけなかった。

「焼けていねえな。や、それにこりや外人だ。アメリカの軍用機かな？」と江原が言う。

「きつと墜落したはずみに、ほうり出されたんだ」と浅田が説明する。「ほら、機体からだいぶ離れているだろう。すごい爆風で飛行服なんか剝がれちゃまっている。ほら、そこにちぎれたきれ端がある」

伊藤は寒気がしてきた。がくがく顫えている彼の足もとに、飛行服の断片、それともかなり大きいのが、なかば草にかくれているのが見えた。

「あっ／＼」と彼は思わず悲鳴をあげた。

「どうした？」と浅田が近よって来た。

伊藤は物も言えず、ただ足もとを指すばかりである。

彼の唇はむなしくピクピクうごいた。

浅田はいたまじそうにそれを見て、「ああ、ここにもあるのか……」と言った。

江原もやって来て、かがみこんでそれに手を触れた。

「これは襟の一部か……や、胸のポケットあたりまであるぞ。ポケットになにかかたいものが入っている」

江原はそれをとり出した。銀色の小さなケースだった。「シガレット・ケースかな？」と言って、彼は蓋をあけた。

「おっ／＼」あけた江原だけではなく、のぞきこんだ浅田も伊藤も、同時に声をのんだ。

「ダイヤモンドだ／＼」江原が叫んだ。

まばゆいばかりのダイヤモンドが、ぎっしり詰まっていたのである。

江原はその一粒をつまんで、かざして見た。「すげえ／＼」



「粒も大きいな」と浅田が言った。「何かラットあるかな?」「おれはダイヤのことなんか知らねえ」江原はぶっきら棒に言った。

「おれの知ってるのは、商売の電気器具だけだ」伊藤も商売の繊維製品以外には、とんと不案内であった。しかし、その形といい光り工合といい、見事なダイヤであることにまちはいいはない。

「大丸で一粒七十万のやつがあった」

と浅田が言った。山男の彼にとって、ダイヤの知識はその程度であろう。

「ざっと百粒以上はいつてる」江原は溜息をついた。

「十粒で七百万、百粒で七千万……いや、一粒十万としても千万以上だ……」

「とにかく大したもんだ」と浅田が言った。

「どうする?」と江原がきいた。

「どうするって? 早く降りて連絡せにやいかんな。

遺体を収容するのが第一だよ。遭難の通報は登山者の義務なんだ」

「このダイヤはどうするってきいてるんだよ?」江原がさげすんだように言った。

「そりや、もどおりにしたいほうがいいよ」浅田はしばらく考えてから「しかし貴重品だから万……」

「おれたちが持って行ってやろう」

薄笑いをうかべながら、江原は言った。

「そうするか」

浅田はなんのわだかまりもなく賛成した。

やがて、例の難所にさしかかった。

「ひでえところだな」これから行こうとする断崖の道を眺めて、江原は立ちどまって一と息ついた。浅田はさきを歩いて行った。

江原は首にかけたタオルをおもむろにはずし、その両端をぐっと握りしめた。満身の力をこめて、そして、足をしのばせて、浅田のうしろからおどりかかった。



浅田の首にまきつけたタオルをゆるめると、江原は一歩とびがった。浅田は崩れるように倒れ、そこにながながとのびて横たわった。

「こいつは堅造だから、どうせ話がわからねえだろうと思つてな」江原は浅田の死体を崖下の急流に蹴おとし伊藤のほうをかえりみて、「いいか、おれたちや飛行機の残骸なんて見ちゃいねえんだぜ、わかったな？」伊藤はごくりと生唾を飲みこんで、辛うじてうなずいた。

「ものわかりがいいじやねえか、おめえさんは、さ、さきへ行きな」

臆病者の伊藤が、断崖絶壁のあいだの狭い道を、すたすた歩いたのは奇蹟に近い。彼は「自然」への恐怖よりは、うしろの兇悪な「人間」の殺意をおそれた。だから一尺幅の危険な道もおそろしくはなかった。

江原の殺意に、伊藤は絶望した。それがあまりにもあきらかだったから。そして、あまりにも人間のにおいがしすぎたから。彼ははじめて「自然」を愛した。

「どうせ助からない！」

そう観念した時、彼はもはや臆病者ではなくなった。歩いているうちに、彼は殺されるまえにするべきことがあるのを悟った。勇者のすることである。彼は落ち着き勇者に変貌した。

道の中で彼は立ちどまった。絶壁を仰いでむきをかえ、そしていちど断崖に目をおとした。ちっともこわいとは思わなかった。

猛烈な勢いで、彼は突進した。

行くてには、銀色のケースを恭々しく手にした江原がいた。彼はその目に言いしれぬ恐怖の色をうかべた。生まれてはじめての恐怖かもしれない。むしろそれが最後の表情だった。――

はるか下で、二つの物体が岩にくだける音がした。つづいて、かわいらしい小さな音。岩のそばに流れのゆるやかな淀みがあった。墜落したとき、江原の手から離れ

たケースの蓋がひらき、ダイヤがそこにまき散らされたのだ。清流にきらめき泳ぐダイヤの群れ、美しかった。しかし一瞬ののち、清流も真っ赤に染まった。

ダイヤは東の間の煙きをみせて、水底深く沈んで行った。ラフト中尉の夫人は甲子園の自宅で良人の遭難をきたされた。彼女はテーブルにうつぶせて泣き崩れた。凶報通知の辛い任を帯びて来たウィルソン軍曹は、慰めの言葉もないまま、彼女のそばに立ちつくした。弔慰金、保険金など合計十六万ドルはいることなど、どうしてこの場で口にすることができよう。――

未亡人は肩をふるわせ、涙のあいまに、ときれときれに悲嘆の言葉を口からもらした。

「可哀そうなメリイ、パパはもう帰ってこない……あんなに可愛がってくれたパパが……クリスマスのお芝居も見てもらえない……女王の役をもらったのに……王冠を飾るきれいな模造宝石を……東京で買ってきてやるとあんなに約束したのに……パパは……パパは」

もだえる彼女の手がテーブルの上を払った。紙と綿で造った王冠が、カサと床におちて、ころころとストロップのそばにころがった。(終)



陳舜臣さんのこと 神戸

出身神戸を舞台に中国人華商の生態を描いた推理小説「枯草の根」で第7回江戸川乱歩賞受賞。昭和18年大阪外語(現大阪外大)インド語科卒、終戦まで同校の西南アジア語研究所の助手、そのご泰安公司勤務。蔡夫人と一男一女がある。現住所は神戸生田区北野町一



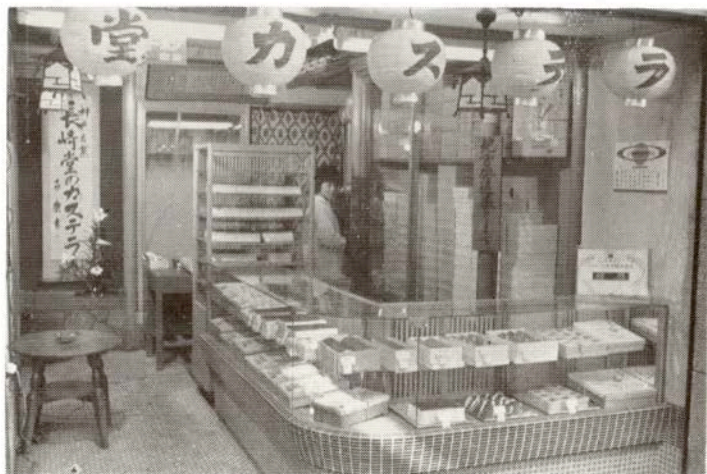
一店紹介

## 長崎堂本店 元町六丁目

大人、こどもはもちろん、みんなに贈って喜ばれるお菓子といえ、まずあの風味ゆたかな味で知られる長崎堂本店のカステーラがある。

神戸は長田区大橋五丁目の商店街の角に堂々と建つ長崎堂本店は創業四十数年を数える、伝統とシニセを誇るカステーラ専門店である。この本店をキーポイントに、元町六丁目の支店をはじめ、神戸大丸、神戸阪急、神戸新聞会館そして遠くは姫路のやまとやしきにとその直売店をもつという手びろさ。

いまの社長、加藤正勝氏は二代



(写真は清潔なフニイキの元町店)

目。同店のカステーラは、材料の吟味、ことに砂糖とタマゴに全神経を集めてらっしゃるとか。そして職歴十五年というベテランが真心こめて焼いているカステーラは、神戸っ子はもとより、和歌山岡山、北は北海道にまで好評を呼び、プレゼント・シーズンのお歳暮やお中元どきはもちろん、年中こんがりキツネ色をしたカステーラが、スギの木箱に納められ西に東へと旅をするという。

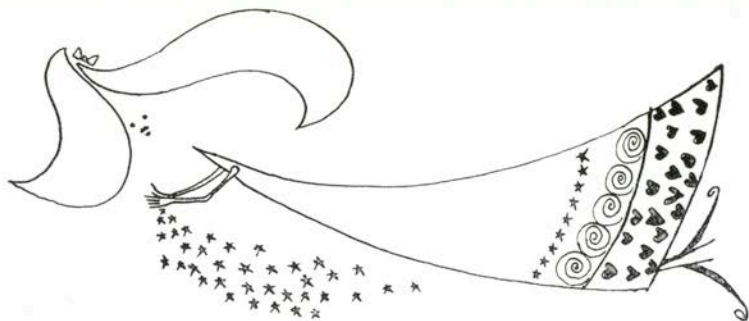
八割までが、看板のカステーラだが、このほか「みかさ」や「ロール巻き」も作っており、カステーラ同様、甘党ファンに歓迎され

ている。

「私どもでは、つねに材料の吟味はもとより、技術面にも研究を重ね、品質についてはお客さまに絶対の自信をもってお売りしております。またお値段の方も勉強させていたただいております。カステーラの魅力は、やはりどなたの口にも合う味ということと、ながもちするということではないでしょうか。ほんとうに贈っても、またもらっても喜んでいただけるお菓子としては最高だと自信をもっております。」大橋本店で営業面を担当してらっしゃる三代目(？)高橋高雄さんは、こう話してらっしゃいます。

(五十嵐)





## 編集後記

・表紙は、九月号でみなさんからご好評をいただいた中西勝氏に再登場ねがいました。詳しくは「表紙のことば」をこらんで下さい。小さく描かれた人物は、キリスト様とか。そういえば先生は、キリスト様に生きうつし—もちろん人柄もです。

・阪本勝氏の「れんさい随想」のいきさつが、ついに公開されました。阪本氏にはご面倒でも「神戸っ子」のため、「れんさい」という名の魔物を当分背負っていただかねばなりません。これもふしぎなご縁とおゆるし下さい。

・はなやかさを：というので宝塚の黒木ひかるさんをゲストに座談会「アレこれ」を企画。この日黒木さんは、朝五時からコマ公演のケイコ引きつづき大劇場の本公演に出演という重労働にもかかわらず、公演後、わが「神戸っ子」のためにかけつけてくださいました。さすがにベテランです。話題も豊富、なによりもそのキモノ姿は美しく、かつ艶麗でした。・神戸っ子の木田ヨシ子さんいままや人気最高の橋幸夫さんの対談わ

## 表紙の言葉

ピンク色の空に散逸する  
白い形の変容  
残り少ない年の瀬を  
ゆりうごかす白い陽は  
むらさきの光に包まれた  
キリストの幻影を映す  
それは私の見た  
神戸の12月である

中西勝  
(二紀会)

## 神戸の女性

枝川英子さん(22才)は神戸銀行にお勤めのお嬢さん。とても音楽ファンでセミクラシックがお好き、とくに、エキゾチックな神戸の街を散歩したり、教会のあたりを歩いていると楽しいとのこと。趣味はお料理に手芸と多彩、お住いは須磨。

撮影 杉尾友士郎

ずか十分間のインタビューに、充分な話とれず残念。二人とも、ハキハキと素直でとてもフレッシュな感じ。木田さんには数少くない神戸出身の歌手として大いに活躍してほしいものです。  
・この十二月で「神戸っ子」は十号目を数えるようになりました。これもみなさまのお蔭と感謝しています。くる年、62年もこれまでと変わりなくかわいがってくださいますように！。(I)

## 月刊「神戸っ子」案内

☆月刊「神戸っ子」を毎月御講読下さいます方、神戸を離れているお友達にプレゼントなさりたい方は編集室宛にお申込下さい。6ヶ月分・500円(送料共)

☆誌上紹介の各神戸の銘店にはお客様へのサービス品として「神戸っ子」がおかれています。  
☆「神戸っ子」をお求めのさいは左記の本屋さんでどうぞ。

文洋堂・国際会館1階  
海文堂・元町3丁目  
漢口堂・京町筋角  
日東館・大丸前  
流泉書房・センター街





# 環境衛生は

# ゴミ箱から！

フタがキッチリしまるので、ハエや  
ゴキブリがはいりません。ツギ目が  
ないから洗たくもOK；ポリペール  
は衛生的なゴミ容器です。神戸の環  
境衛生は清潔なゴミ箱からおはじめ  
ください。

〈小売価格〉  
1800円



硬質ポリエチレン製  
新家庭にぜひお備え下さい


セキスイ

# ポリペール

プラスチックの積水化学



「暖かい宝石ですね、真珠は」と言って、石井好子さんはロマンチックな目をされた。そして「外国で日本人にあうでしょう。たいてい真珠をつけますからね。まあ、真珠と言えば日本の代表だから」とおっしゃる。たしかにミキモトパールは日本を代表する宝石です。

御木本真珠店  神戸店：神戸国際会館内 大阪店：新大ビル内



カタログお送り致します。雑誌名御記入にてお申込下さい